HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	巻頭言
Author(s)	川田, 学
Citation	子ども発達臨床研究, 21
Issue Date	2024-11-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93811
Type	other
File Information	002-1882-1707-21.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

巻 頭 言

本紀要は、科研費プロジェクト「日本・ニュージーランド・イタリアにおける保育カリキュラムの創造と評価の研究」（代表者・塩崎美穂）の特別号である。2023 年 2 月、世界がようやく COVID-19 パンデミックから抜け出してきた時期に、私たちはイタリアへと旅立った。研究者だけでなく、保育実践者や学生を含む総勢 12 名で、フィレンツェ市を拠点とし、トスカーナ州およびエミリア・ロマーニャ州の保育施設や学校等を視察して回った。

視察内容の詳細は、塩崎氏の総論を参照していただくとして、ここではその旅の様子を記しておきたい。フィレンツェでは、旧市街の郊外の住宅地に合宿できる宿を借り、男性棟と女性棟に分かれて滞在した。調査研究を目的とした研究者集団に、学生のみならず保育実践者複数名が同伴するスタイルは、決して一般的とは言えない。しかし、本研究が保育カリキュラムの根底にある思想・哲学の国際比較研究であることに鑑みれば、他国の保育者にヒアリングする際に日本の保育者を同伴していることは、研究方法上も重要な意味を持つ。

日本に限らず、乳幼児を対象とした実践では非言語的な相互作用が重要な位置を占め、言語化の容易ではない実践知の層に厚い。コミュニケーションを通して、身体化された知の輪郭をとらえていくとき、文化を超えて“同業者”であることによる気づきや違和感は重要な手がかりとなる。今般の調査に臨んだ研究者は、長年にわたり保育者や保育現場から多くを学んだ者であり、“実践的研究者”としての性格を持っている。しかし、異国の現場を訪れ、聞き取りをし、移動の間や宿に戻ってから経験を振り返る対話の中に、やはり実践者が存在していることの意味は大きかった。“実践者伴走型調査”とでも呼ぶべきこの方法は、保育研究において今後より深めていくと面白いかもしれない。

訪伊においては、研究代表の塩崎美穂氏の獅子奮迅のコーディネートがあったことをまず記しておかなければならない。また、こちらの意を汲みながら見事な通訳をしてくださった在フィレンツェの小泉真樹氏と緒方牧子氏に感謝申し上げる。本特別号には、Istituto degli Innocenti（イノチェンティ研究所）の Maurizio Parente 氏にイタリアにおける特別な教育的ニーズに関する論考をご寄稿いただいた。Parente 氏には早くから論文をお送りいただいていたにもかかわらず、本紀要の発行が遅れたことをお詫びし、重ねてお礼をお伝えしたい。なお、イタリアの教育について広く知っていただくために、Parente 論文の日本語訳版も用意した。翻訳にあたっては、北海道大学大学院教育学院・博士後期課程の髙坂千里さんに多くの労を取っていただいた。記して謝意を申し上げたい。

本特別号が研究者のみならず、実践にたずさわる方々の手に届くことを期待し、ささやかな巻頭言としたい。

川　田　　学